

茶陶をプロデュース！^{うばがもちやき}姥餅焼。

らくいもがしらみずさし

楽芋頭水差 銘芋頭

(草津市蔵・中神コレクション)



近江は古くから東西交通の要衝として発展し、街道を通じて多くの文化が行き交った場所でした。その道にあって旅人にひと時の癒しを与えたのが草津名物「うばがもち」です。「瀬田へ廻るか 矢橋へ下るか 此処が思案のうばがもち」という歌がある通り、その分岐点に店がありました。立地条件に恵まれていた姥ヶ餅屋は、数多くの旅人でにぎわい、街道の文化が育まれる場となっていました。

近江の焼きものの一つに数えられる「姥餅焼」は、その店で使う餅皿を焼いたのが始まりとされています。往来の休憩所として親しまれ、訪れる人々との交流の中で、八代目当主瀬川都義（くによし）は広く茶道、文芸を志し、親交を深めていきました。

寛政11年（1799）に京都の儒学者、皆川淇園（みながわきえん）が記した姥ヶ餅屋の由来書「養老亭記」によると、自宅に築山を設けて庭を造り、茶室を設けて来駕の諸公や諸貴人に、衣服・茶器の類を披露していたようです。寛政9年（1797）に出版された『伊勢参宮名所図会（いせんぐうめいしょずえ）』には広い庭園をともなった姥ヶ餅屋養老亭の景観が描かれ、庭園を眺める

旅人や駕籠に乗って訪れる人々の様子が表されています。

膳所藩主本多康完（やすさだ）などとも茶会を催していた都義は、茶の湯で使う陶器の茶陶にも興味を抱き、自らも草津に窯を築くとともに、当時の名陶工にも『姥餅』の窯印を預け、茶碗や水指、香合などの茶道具を「姥餅焼」として焼き始めるようになりました。

こうして、瀬川都義によって茶陶へと発展した「姥餅焼」は、楽焼の九代・了入（りょうにゅう）など京や信楽の陶工にも作陶を依頼していたとされます。中でも楽焼には名品が多く、了入作と伝えられる水差しには、了入の特徴である斜めに走るヘラ削りがみられ、名匠の作品の風格をもっているといえるでしょう。後の十代目当主金沢好澄（こうちょう）もまた風流文化人であり、同様に『姥餅』の窯印を預け、各地の名陶写しを焼くなどしたようです。『姥餅』の刻印をもった陶器はまさに玉石混合、それぞれの時代の流行を映す作陶作品が含まれています。

近江を代表する茶陶「姥餅焼」は一つの地域で作陶されたものではなく、草津名物「うばがもち」の生んだ文化サロンを発信源とする、街道文化の創り出した茶陶ともいえるものでした。

(令和7年1月・草津宿街道交流館 吉崎 早苗)



伊勢参宮名所図会（草津市蔵）